

## 掲載コンテンツのご紹介

平成19年度に全国から応募されました地域文化資産映像を、審査委員会にて分野別・地域別を考慮し厳正なる審査を行いました結果、104本の地域映像が選定されました。

以下に104本の地域映像の概要をご紹介します。実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。

(平成20年3月31日までに合併予定の市町村については合併後の市町村名を記載しています)



### 北海道 小平町 鬼鹿松前神楽

「松前神楽」は北海道に伝わる神事芸能です。「松前町史」によれば、その発祥は延宝（エンポウ）2年（1674）、松前藩の城内神事（ジョウナイシンジ）としてはじめられたとされています。  
鬼鹿松前神楽（オニシカマツマエカグラ）は、明治34年（1901年）その伝承者である瀧川弁蔵（タキカワベンゾウ）氏により伝えられたとされ、鯨漁（ニシンリョウ）華やかな頃は鯨場（ニシンバ）の親方に招かれ盛大な正月神楽や門祓（カドバラ）いが行なわれていました。鯨がとれなくなると、一時は神楽も衰えましたが、伝統文化を残そうという気運が高まり昭和50年（1975年）保存会が結成され、平成元年（1989年）には小平町無形文化財に指定されました。  
(行事開催日：5月最終日曜日)



### 北海道 札幌市 丘珠獅子舞 札幌市無形文化財

丘珠獅子舞は、明治25年に富山県福野町安居（フクノチョウヤスイ）からの移住者により伝えられ、以後100年有余年にわたり当時の姿そのままに伝承されている貴重な伝統芸能です。  
舞いは神社までの「道中」、神社鳥居から拝殿までの「行列」、拝殿前の「睨み」の所作があり、その他用具別に「小薙刀（ナギナタ）の舞」、「唐笠の舞」など12の舞があります。  
丘珠獅子舞の伝承方法は人伝えで行っていますが、舞の原型を確実に後世に伝えるためには映像による指導が効果的と考え、「歴史篇（本映像）」を始めとした伝承ビデオを本市が制作しました。



### 青森県 藤崎町（旧常盤村） コミュニティを支える絆 ～常盤八幡宮年縄奉納行事～

常盤村では、毎年正月の元旦に「としな」（年縄）を奉納する行事があります。正月の朝9時、長さ4.4m、幅2.3m、重さ400kgになる巨大な年縄の行列が出発します。男たちは締め込み1本の裸で年縄を担ぎ、八幡宮まで、お囃子と共にこれ運び、五穀豊穡を祈ります。前年の12月16日から末までかかって、大注連縄、邪払、福俵、柳樽、旗、額の6種を製作します。お囃子を含め、これらの制作は、常盤地区コミュニティ活動推進協議会により行われ、伝承されています。



### 青森県 板柳町 五林平太刀振り

板柳町は青森県の中西部、岩木山と戸川に挟まれた位置にある町です。この町の北東部五林平地区では、毎年旧暦の6月1日（早苗ぶり）の頃、虫送りの行事を行います。このとき村の中にいる虫を若い男女が竹を太刀に看たてて、激しく振り回し、虫を追い出します。この行事は、宝暦12年沿川沿草誌にも記載があることから、約350年前から、継承されていると言われています。  
最近では、8月の「リンゴ灯まつり」に、県下登山競演大会でも、五林平太刀振保存会が実演を行うようになりました。昭和62年、板柳町指定無形文化財となりました。(行事開催日：春・夏)



### 青森県 鶴田町 弥生画

日本の農作の夜明けといわれる弥生時代に、穀類・種子類が中国より朝鮮を経て日本に入ってきたといわれ、弥生画の名称がそこから生まれました。寛政元年（1789年）は夏中ひでりが続き思いあまった山道の村人達が残り少ない種子類をみんなで持ち寄ったのはこのときではないかと思われています。翌、寛政2年は豊作で、凶作で離散した農民も帰村、荒田も開発され、備荒貯蓄のため郷蔵の制度もこの年に新設されています。  
弥生画はそれ以後、毎年制作し続けられて、現在に至ったものと推察されます。鶴田町では今日まで町内の青年達を中心に下絵を描ける人が次々とその制作を受け継いできています。



### 岩手県 花巻市 花巻地方の民間信仰 マイリノホトケ

「マイリノホトケ」は岩手県に広く見られる民間信仰であり、一族や同じ地域の人々が旧暦10月に集まり、阿弥陀如来（アミダニョライ）・聖徳太子・六字名号（ロクジミョウゴウ）などを拝んで祖先を供養するものです。県中南部に集中して分布しており、花巻地方では県全体のおよそ4分の1にあたる約100箇所確認されています。  
信仰対象とされる掛軸や像には室町時代以前の物も含まれ、これら資料から、浄土真宗や善光寺信仰などが伝わった当時の状況が推測されます。一方、旧暦10月という時期特定の原因や信仰対象・目的の多様性については、今後の研究が必要です。現状として、信仰を維持してきた地域・血族・家の衰退という状況が大きな課題となりつつあります。



### 岩手県 <sup>かまいし</sup>釜石市 <sup>かまいし しきょう ど げいのうさい</sup>釜石市郷土芸能祭

釜石市には、古くから伝わる郷土芸能が数多く存在し、その代表的なものとして虎舞、神楽、太神楽（ダイカグラ）、鹿踊りが挙げられます。  
本映像記録は、平成19年3月4日開催の第18回釜石市郷土芸能祭に出演した常龍山御神楽（ジョウリュウザンミカグラ）、小川（コガワ）幼稚園しし踊り、釜商（カマショウ）虎舞、澤田鹿踊り、片岸（カタギシ）虎舞、丹内（タンナイ）神楽を取りあげたものです。小川幼稚園しし踊り、釜商虎舞を除く団体は、いずれも釜石市指定民俗無形文化財となっており、現在も祭りなどの行事に出演しています。また、後継者の育成にあたり、幼稚園や小学校でも郷土芸能に触れる機会を設けるなど、活動の活性化及び伝承に勤めています。



### 岩手県 <sup>しずくいしちよう</sup>雫石町 <sup>しずくいしちよう</sup>雫石町 <sup>みんぞくげいのう</sup>民俗芸能 <sup>あにわ</sup>安庭あやつり <sup>にんぎょうしばい</sup>人形芝居

岩手県雫石町に残る安庭あやつり人形芝居は、秋田県の猿倉（サルクラ）人形芝居の系統を受け継ぐ伝統人形芝居です。大正13年頃、丸太今朝造（マルタケサゾウ）（猿倉人形芝居創始者、池田予八（ヨハチ）の弟子）率いる一座が雫石を巡業した時、この人形芝居に魅せられ追うように入座したのが、地元安庭の青年、細川長二郎です。長二郎は下働きから芸を身につけ、昭和3年に独立。細川人形芝居（後の安庭あやつり人形芝居）を旗揚げし、県内各地で巡業を行い、人気を博しました。  
この記録映像では、安庭あやつり人形芝居成立の背景から、現在の保存会の活動状況、演目の復活に向けた取り組みなど、伝統人形芝居のもつ魅力を存分に紹介しています。（行事開催日：11月23日）



### 宮城県 <sup>とめし</sup>登米市（旧登米町） <sup>とよま</sup>登米能を受け継ぐ <sup>う つ ひとびと</sup>人々

伊達（ダテ）一門の格式を持つ登米伊達家の領内では、能が盛んに行われていました。明治の廃藩後、仙台藩領内の多くの能楽が廃れていった中で、登米では伊達家の旧家臣「大内五郎右衛門（オオウチゴロウエモン）」が中心となり「登米能」として継承してきました。その「登米能」は現在、「登米謡曲会（トヨマヨウキョクカイ）」が継承し、年2回春と秋に「薪能（タキモノウ）」として公開されています。  
映像は、登米能を受け継ぐ登米謡曲会の会員の「能とのかかわり」と「森舞台」で演じられる薪能の様子を中心にまとめています。



### 秋田県 <sup>だいせんし</sup>大仙市 <sup>あきたけん むけいぶん かざいしてい</sup>秋田県無形文化財指定 <sup>くにみ</sup>国見ささら

秋田県仙北地方に伝わる数多くの「ささら」は、大きく分けて南部系と関東系の2つに分かれます。国見さららは佐竹士族から伝わった関東系のさららです。佐竹公のお国替えの際には、さららの一団が行列の先を進み、行く先々の悪霊地霊を払い鎮めるために舞ったと伝えられています。その舞い姿には力強はもちろん品格がうかがえます。  
ささら舞いには4つの種類があります。家々を回る路上や神社でも舞われる「神立（カンダチ）」、主に神社で舞われる「神楽」、仏前や墓場で舞われる「霊幕（レンボ）」、仏前で舞われ、一名供養ささらと呼ばれる「眠り（ネマリ）」です。1つの舞いが終わると、道化者のカッキリ（ザツアカ）の扇舞で舞い納めとなります。（行事開催日：7月下旬～8月下旬）



### 秋田県 <sup>だいせんし</sup>大仙市 <sup>せんぼくち ほう</sup>仙北地方の <sup>ながの</sup>ささら <sup>ながの</sup>長野ささら

長野さららは、佐竹公のお国替えにより関東から伝えられ、悪魔払い、先祖供養、五穀豊穡（ゴコクホウジョウ）を祈願する盆行事として今日まで伝えられています。  
この地域では、ささらを舞うことを「ささらを擦（ス）る」といいます。8月13日の夜に「宿（ヤド）」と呼ばれる指導者の自宅の前で最初のささらを擦ったあと、一行は行列を組んでねり歩き、曾溪寺（ソウケイジ）へ向かいます。この移動を「なで渡り」といいます。そのあと、善法寺（ゼンポウジ）へと場所を移し、それから地域内を4日間かけて擦り歩きます。地域をくまなく回ったささらの一行は宿へと戻り、最後の「獅子送り」を行います。



### 福島県 <sup>あいづわかまつし</sup>会津若松市 <sup>あいづさんびきじ しまい</sup>会津三匹獅子舞

会津三匹獅子舞は、春彼岸に各戸の庭先で家内安全、五穀豊穡、先祖の供養を願いながら舞われる羯鼓（カッコ）獅子舞であり、会津の人々は悲願獅子の囃子（ハヤシ）の音で春を感じると言われています。舞い方は獅子3名（太夫（タクウ）獅子、雌獅子、雄獅子）と幣舞小僧（ヘイマイコゾウ）1名からなり、会津若松市の天寧（テンネイ）、下居合（シモイアワセ）、本瀧沢（ホンタキザワ）の3地区の獅子舞は、会津若松市指定重要無形民俗文化財に指定されています。  
由来については諸説ありますが、地元では、今から約300年前、会津一円に悪疫（アクエキ）が流行し、死者数知れずの惨禍（サンカ）があった際に、主な寺社に獅子舞を奉納し平癒を祈願したところ次第に収束したと伝えられ、折しも春彼岸であったために彼岸獅子と呼ぶようになったともいわれています。（行事開催日：3月18日～24日）



### 福島県 <sup>みなみそう まし</sup>南相馬市（旧原町市） <sup>はらまち</sup>北萱浜の <sup>きたかいはま</sup>神楽・ <sup>かぐら</sup>天狗舞 <sup>てんぐまい</sup>

享保（キョウホ）15年天野備後（アマノビゴ）が村内安全と火伏せ（ヒブセ）の祈願を込めて里社八竜大権現（サトシヤハチリュウダイゴンゲン）に獅子神楽を奉納し、その後この神楽に目を付けた馬場村の修験観行院（シュゲンカンコウイン）の法院が文化年間獅子神楽の余興として、「万歳」、「鳥刺し踊り」、「鬼踊り」、「茶屋建踊り」、「おいとこ」、「田植え踊り」、「大黒舞」の神楽七芸を習得して帰り、肝入（キモイリ）、検断（ケンダン）、村長、百石頭（ヒヤッコクカシラ）等と相談の上、若衆に教えたのに始まると伝えられています。  
正月や鎮守の祭などに神楽が戸ごとに巡って、悪魔払いや、火伏せ、雨乞いを祈願して舞い歩いて、その時、肝入や宿の御礼として神楽七芸が踊られました。明治22年からは、馬場青年団に引き継がれています。



### 福島県 <sup>ただみまち</sup>只見町 <sup>こばやし</sup>小林の <sup>さおとめおど</sup>早乙女踊り

早乙女踊りは、東北地方に伝わる田植え踊りの1つで、古くは会津地方全域で行われていました。明治以降、行方ところが少なくなり、小林地方では昭和35年に保存会を結成し、後継者育成を行いながら伝統を伝えていきます。  
早乙女は、近在の若い男子が扮するのが慣わしで、囃子とともに各家々に舞い込みます。  
踊り手は早乙女が2名、道化（ヒョットコ）が1名、「楽屋」と呼ばれる囃子は笛が2名、太鼓、三味線、鉦（シヨウ）がそれぞれ1名で、歌い手はその他全員が参加します。  
踊りは、「早乙女踊り」、「小林甚句（ジンク）」、「小林おけさ」に順で行われますが、踊りが終わると、獅子舞2名とヒョットコ1名による神楽が舞い込みます。（行事開催日：1月14日）



### 茨城県 常陸大宮市 那須楮と西ノ内紙

茨城県北部および境を接する栃木県那須郡地域は、近世、質・量ともに誇る紙の一大生産地でした。その紙の代表が常陸水戸領で多く漉（ス）かれた西ノ内紙であり、高い品質を支えたのは、那須楮の名で流通した茨城県北部山間地産の楮でした。現在は越前奉書や本美濃紙の原料として欠くことのできない那須楮は、生産者の高齢化や安価な外国産楮の輸入により生産体制の存続が危ぶまれています。

この映像は、栽培から白皮（シロカワ）加工までの詳細な記録である「那須楮編」と、諸藩の御用紙や商家の大福帳（ダイフクチョウ）として格式と強靭さを併せ持った西ノ内紙の特性を原料の処理法や漉き方などの技術から見てゆくと共に、歴史的な変遷もたどる「西ノ内紙編」の2部構成となっています。



### 茨城県 常陸大宮市（旧那珂郡大宮町） 大宮町の年中行事

茨城県那珂郡大宮町（現 常陸大宮市）小祝（コイワイ）地区を中心とした、多種多様な年中行事の記録です。地区の古老が書き残した大正期の農村の生活誌をテキストとして、今は行われていない行事もできるだけ再現し、他地域の特徴ある行事も織り交ぜて、家、同族、地域と、祭礼の場が変化に富む年中行事を紹介しています。同時に農作業や信仰・自然の移ろいに寄り添う生活と年中行事が密接に関わってきたことを理解できるよう、取材、編集を行いました。ビデオ「大宮町の祇園」「大宮町の講」とともに、報告書『大宮町の年中行事』（平成12年）とリンクしているものです。



### 茨城県 常陸大宮市（旧那珂郡大宮町） 大宮町の祇園-茨城県大宮町 素鷲神社祇園祭-

茨城県那珂郡大宮町（現 常陸大宮市）素鷲神社（ソガジンジャ）の祇園祭を、史料と古老からの聞き取りを交え、現行の祭礼と比較して紹介しています。勇壮な裸神輿として県下に名高い「大宮の祇園」は、300年以上にわたり受け継がれてきた当地を代表する夏祭りです。道路事情によって昭和40年代に神輿や屋台の巡行が途絶え、10年以上を経て復活したときには、祭礼の形だけではなく人々の意識も変化していました。平成10年に行なわれた祇園祭の記録をもとに、祭りの意味や地域に果たして来た役割をもう一度見直し、後世に伝えようとしたものです。ビデオ「大宮町の年中行事」「大宮町の講」とともに、報告書大宮町の年中行事（平成12年）とリンクしているものです。（行事開催日：7月第4金・土）



### 群馬県 藤岡市（旧鬼石町） 御倉御子神社太々神楽舞 琴平神社太々神楽舞

浄法寺八塩（ジョウボウジャシオ）の御倉御子神社の秋季例大祭に神楽殿で氏子達により太々神楽が奉納されます。伝承は藤岡下栗須（シモクリス）から伝えられたもので、流派は大和流です。元は江戸の流れをくんだ当地にて最初に奉納舞を行ったとされています。（行事開催日：10月9日前後）

三波川大内平（サンバガワオオウチダイラ）の琴平神社で、毎年春季大祭を行い氏子によって神楽が奉納されます。伝承は藤岡土師神社（ドンジンジャ）から伝えられたと言われていましたが、実はその頃、八塩の御倉御子神社の氏子の手ほどきを受けたのが始まりです。一村人が伝授し引き継がれてきた貴重な神楽舞です。（行事開催日：4月10日前後）



### 群馬県 安中市（旧松井田町） 峠のまち 松井田の獅子舞

群馬県の西部、長野県との県境に位置し、碓氷峠を有する安中市松井田町は、交通の要衝として古くから発達し、江戸時代には中山道の宿場として栄えました。

松井田町に伝承される獅子舞は、現在活動する7団体によって保存されています。本映像では、そのうち、諏訪神社を本拠地として新井獅子舞（鷹盛慶雲流）と、八坂神社を拠点とする上増田獅子舞（三国判官流）を紹介します。ともに、一人が一体を担当する一人立ち獅子を特徴とし、3体の獅子と狐のオトウカが登場します。新井獅子舞は、勇壮さを特徴としており、一方、上増田獅子舞は清楚で優雅だと言われています。今回は松井田町を代表する神社のひとつ、碓氷峠熊野神社で収録。碓氷峠熊野神社は、中山道一の難所・碓氷峠の頂上付近、群馬県と長野県の県境にあります。



### 群馬県 玉村町 五料の水神祭

水神祭は五料の飯玉神社（イイタマジンジャ）に合祀（ゴウシ）された水神様の祭りです。かつては7月25日に行われていましたが、現在は、原則7月最終日曜日に行われています。利根川と鳥川が合流する五料（ゴリョウ）はかつて船頭の村で、江戸時代には2つの河岸がありました。水神祭りは水難除け祈願から始まったとされています。

現在は祭りの1週間前の日曜日に神社の境内で麦わらや青竹などを使って、本物そっくりの約7mの舟をつくります。祭り当日は子供たちが舟をリヤカーに乗せて地区を曳いてまわり、薄暗くなった頃、麦わら舟は大人たちにより担がれ、利根川に流されます。水神祭りは平成14年に国の記録作成等の措置を構すべき無形の民俗文化財に選択されました。



### 埼玉県 熊谷市 熊谷市指定無形民俗文化財 葛和田のあばれみこし-大杉神社祭礼行事-

熊谷市北東部、利根川沿いの葛和田（クズワダ）地区はかつて、利根川水運の河岸として賑わいました。河岸に鎮座した大杉神社は、水難守護の神として信仰され、祭日には各地から数百の船が接岸したといわれています。

祭りは、神明社（大杉神社を合祀）を起点に、神輿が葛和田・大野・俄瀬（タワラセ）の3地区を巡るものです。沿道の家々は、食べ物や飲み物を用意して神輿を迎え、渡御する神輿は盛んに水をかけられながら激しく上下にもまれます。また、神輿の屋根で担ぎ手たちが肩を組み、四方から頭をつき合わせて力比べをします。利根川の中で一層激しく行われる力比べや、かつては川を渡御したという記録は、この祭りが特色ある疫病除けの夏祭りであることを伝えています。（行事開催日：7月下旬日曜日）



### 埼玉県 富士見市 復原 旧大澤家住宅 埼玉県富士見市で見た匠の技術

平成12年6月にオープンした富士見市立難波田城公園（ナンバタジョウコウエン）に移築された旧大澤家住宅（市指定有形文化財）の復原工事を記録したもので、長編と短編があります。

大澤家は江戸時代に代々名主（ナヌシ）を務めた家柄で、明治4年（1871）建築の当住宅には随所に名主宅特有の造りが見られます。また、小屋組み・土壁・茅葺（カヤブキ）屋根・建具・畳など日本の古民家建築の技術がよくわかる内容になっています。



埼玉県 <sup>はすだし</sup> 蓮田市 <sup>うるいど</sup> 閩戸 <sup>しきさんば</sup> の式三番

埼玉県蓮田市「閩戸の式三番」は、国選択無形民俗文化財・県指定無形民俗文化財に指定されており、県内で唯一残されているものです。閩戸の式三番は宝永年間（ホウエイネンカン）に秀源寺（シュウゲンジ）の僧が愛宕明神（アタゴミョウジン）を祀った時に、五能三番（ゴノウサンパン）の舞を復活したという伝承以外に由来は分かりません。

本映像は、由来や式三番が伝承された背景、翁（オキ）・三番叟（サンバソウ）・千歳（センザイ）という演じ手の役割等も解説を加えながら、「閩戸の式三番」の紹介を行っているものであり、どなたでも簡単に式三番の歴史的背景や成り立ちを理解して頂く事が出来ると思います。（行事開催日：10月第2土曜日）



千葉県 <sup>ちやうしし</sup> 銚子市 <sup>ちやうし</sup> 銚子の祭り太鼓

日本有数の漁業のまち、千葉県銚子市。ここでの祭りで演じられてきた「はね太鼓」「はね込み太鼓」は漁師町らしい勇壮な太鼓で2人の打ち手が組みになり太鼓を肩に担ぎ上げ、跳ね回りながら打ち鳴らすものです。

この映像記録では独特な祭り太鼓の迫力ある実演や練習風景、大潮祭りをはじめとする地元の祭礼の様子、「銚子大漁節（タイリョウブシ）」成り立ちなどを美しい銚子の風景を織り交ぜながら映しだしています。



千葉県 <sup>あさひし</sup> 旭市 <sup>まい</sup> つく舞（エンヤーホー） <sup>あさひしてんじんく や さかじんじやさいれい</sup> 旭市天神区八坂神社祭礼

旭市宿天神区では、毎年7月26日から同月28にかけて、八坂神社の太田祇園が行われます。つく舞は本祭（27日）日没後、地区内を練り歩いた御輿が神社に戻ってきてから境内の舞台で子どもたちの「エンヤーホー」という掛け声の中で始まります。

エンヤーホーとは、地元では「陰陽ホー」がなまったものといわれており、五穀豊穡、悪霊退散、子孫繁栄の願い込められた芸能です。決まった所作はなく、虫・鳥・獣が田畑を荒らす様子や子孫繁栄の無言劇が演じられた後、最後に昇り獅子が高さ16mのつく柱で命綱をつけずに曲芸を舞い、最高潮に達します。（行事開催日：7月27日）



東京都 <sup>しぶやく</sup> 渋谷区 <sup>しぶやくしていむけいみんぞくぶんかざい</sup> 渋谷区指定無形民俗文化財 <sup>よよぎばやし</sup> 代々木囃子 <sup>よよぎ</sup> 代々木もちつき唄

渋谷区代々木の地に古くから鎮座する代々木八幡宮において行われる、代々木囃子及び代々木もちつき唄は、平成17年度に渋谷区指定無形民俗文化財となりました。その伝統文化を保存し後世に伝える為、また地域に根ざした大切な文化が住民と触れ合う様子を紹介する為、記録保存的な意味を含めて制作しました。（行事開催日：1月末）

映像は、代々木囃子が例大祭で演奏する模様や練習風景、代々木囃子の歴史を保存会会長の話を交えながら記録しました。代々木もちつき唄は、八幡宮で行われる節分会（セツブンエ）で配るもちをつくる作業行程を保存会会長の唄や話とともに紹介し、節分会に集まる多くの人々の様子を記録しました。（行事開催日：9月）



東京都 <sup>ふちやうし</sup> 府中市 <sup>おおくにたまじんじやれいたいさい</sup> 大國魂神社例大祭 <sup>まつ</sup> くらやみ祭り

府中の中心にある大國魂神社では、5月5日の神輿渡御（ミコシトギョ）を中心として、くらやみ祭が毎年行われます。3日の「競馬式（コマクラベ）」、4日の「万灯大会（マントウタイカイ）」「山車行列（ダシギョウレツ）」、5日の「太鼓送り込み（タイコオクリコミ）」そして、暗闇の中で最高の盛り上がりを見せる「神輿渡御」、6日早朝の「神輿渡御（カンギョ）」など様々な行事が行われます。

祭りのメインイベントである“おいで”と呼ばれる神輿渡御は、5日午後6時～、花火の合図とともに、国内最大級の6張りの大太鼓が地鳴りのごとく打ち鳴らされ、8基の神輿は、大太鼓と提灯（チョウチン）の灯りに導かれ、神社の本殿から御旅所（オタバシヨ）（神社を出て約220m先）まで渡御されます。



東京都 <sup>のし</sup> あきる野市 <sup>あきるじんじやれいたいさい</sup> 阿伎留神社例大祭

阿伎留神社創立起源は不詳ですが、平安時代の「延喜式（エンギシキ）」に記載されていると伝えられる由緒ある神社です。毎年9月28日から30日の3日間、例大祭が行われ、六角形の大きな神輿（ミコシ）が7町を渡御します。中学生による神輿も繰り出され、人気があります。また、この露払いとして五日市入野（イツカイチイリノ）獅子舞が奉納され、祭りを一段と盛り上げます。映像では、祭りの神事から神輿渡御（トギョ）や獅子舞、囃子などの奉納の様子など、祭りにかかわる様々な人々の姿を紹介しています。



神奈川県 <sup>あいかわまち</sup> 愛川町 <sup>みませ</sup> 三増の獅子舞

三増諏訪神社境内に合祀される八坂神社祭礼時の奉納舞です。約300年ほど前から行われていたと伝わっています。2度の中絶を経て昭和30年に復活しました。昭和36年、神奈川県指定文化財となったことを機会に保存会を設立しました。女性たちの参加や、地元愛川高校授業に取り入れられたことにより、後継者育成活動は、順調に発展しています。

舞の形式は、1頭の獅子を1人が演じる一人立ち三頭獅子舞と呼ばれるものです。獅子は父の巻獅子（マジジ）、母の玉獅子（タマジシ）、子の剣獅子（ケンジシ）からなり、この他、姥（ウバ）面をかぶった教導役としてのパンバ、露はらいの天狗等が加わります。（行事開催日：7月20日前後の日曜日）



新潟県 <sup>むらかみし</sup> 村上市 <sup>えちごむらかみたなばまつ</sup> 越後村上七夕祭り <sup>さいれいへん</sup> 祭礼編

200年を超す歴史を持つ「越後村上七夕祭り」は、毎年8月16、17日に行われます。二輪の台車に皇大神（コウタイシン）を祀る伊勢堂、押絵を用い歌舞伎や芝居、古今の物語を表現した雪洞（ボンボリ）、花笠（ハナガサ）で構成された七夕屋台が、若衆（ワカシュウ）の威勢のよい掛け声と祭囃子で賑（ニギ）やかに引き廻されていきます。親類縁者の家々の前や路上では、頼まれて七夕祭りの唄に合わせて「家内安全、商売繁盛」を祈り獅子舞を舞います。

古くは睡魔を払う「ねぶり流し」、そして江戸時代五節句のひとつとして中国から伝来した星祭、さらに邪気を払い悪魔を退散し、伊勢の天照大神（アマテラスオオミカミ）に延命を祈願する伊勢信仰、其々が結びつき、明治時代に今の形になったと言われています。



新潟県 <sup>たがみまち</sup> 田上町 <sup>ゆかわごしゃじんじや</sup> 湯川五社神社 <sup>かぐらまい</sup> 神楽舞

新潟県の中央に位置する田上町は、歴史と自然豊かな町です。湯川五社神社に毎年奉納される神楽は、文化8年に神社再建を祈願して奉納されたのがはじまりといわれています。戦時中、舞は一時中断されていましたが戦後まもなく復活し、昭和32年には湯川五社神社伶人（レイジン）会が発足し現在に至っています。当初14、15曲あった神楽は、現在では9曲を残すのみです。豊作祈願・悪霊退散・無病息災など、祈願する内容によって舞は異なります。本映像では、9曲の舞をその趣旨や目的の解説とともに記録しています。



新潟県 <sup>あがまち</sup> 阿賀町（旧三川村） <sup>みかわむら</sup> 綱木のいな虫送り <sup>つなぎ</sup> <sup>むしおく</sup>

美しい田園風景の広がる旧三川村綱木地区。80世帯約230人が住んでいます。かつては新発田（シバタ）から会津へぬける旧会津街道の宿場町として栄えました。「いな虫送り」は、稲に虫が付くことなく豊作になるよう祈願する行事です。戦中戦後も休まず行われ、現在は毎年7月に行われています。主役は子ども達。子供同士で太鼓のたたき方を教えあう風景や、老人の昔話、菖蒲と葵で作られる社壇の準備の様子、そして行事当日の様様を伝えます。



新潟県 <sup>にいがたし</sup> 新潟市 <sup>にいがたし</sup> 新潟市の伝統芸能 <sup>でんとうげいのう</sup> 「神楽」 <sup>かぐら</sup>

新潟市で伝承されている神楽には、出雲流の太々神楽（ダイダイカグラ）と獅子神楽があります。この映像で主に紹介している太々神楽は古事記や日本書紀などに見られる神話や伝説を表現したもので、大人が舞う太夫舞（タユウマイ）と子どもが舞う稚児舞（チゴマイ）があります。

荘厳なものから滑稽味（コッケイミ）のあるものまで、さまざまある神楽の舞いを、新潟市内の各神楽の様子を交えて紹介しています。



富山県 <sup>たかおかし</sup> 高岡市 <sup>たかおかどうき</sup> 高岡銅器 <sup>たかおかしつき</sup> 高岡漆器

生活用具や仏具、灯籠（トウロウ）、梵鐘（ボンショウ）から大仏に至るまで、わが国の銅器の90パーセントを生産する高岡銅器。作品のデザインから仕上げまで、1つの町がすべての技術集団を抱える高岡銅器の特徴を紹介しています。

高岡の職人の技術の粋を集めた絢爛豪華な御車山（ミクルマヤマ）（重要有形無形民俗文化財）に集結された高岡漆器の多彩な技。町人文化の中にしっかりと根付き、発展してきた高岡漆器の魅力を紹介しています。

平成17年8月、史上3人目となる鍍金（チュウキン）の人間国宝に認定された大澤光民氏の代表的な作品と仕事ぶり、インタビューをハイライトで紹介しています。



富山県 <sup>ひみし</sup> 氷見市 <sup>ひみ</sup> 氷見の祇園祭り <sup>ぎおんまつ</sup> ～八坂神社夏季例大祭～ <sup>やさかじんじや</sup> <sup>きれいたいさい</sup>

氷見の祇園祭は、毎年7月13・14日の両日、中の橋を挟んで南の日吉神社の氏子十町と北の日宮神社（ヒノミヤジンジャ）の氏子六町で行われる夏祭りです。神輿と太鼓台が巡行します。南町には14日には5台の曳山も引き出される氷見市最大の祭礼です。この祭りの由来については、諸説ありますが元禄ごろ氷見町一帯に流行した疫病封じのため、南町の御座町（ゴザマチ）が京都の八坂神社の祭神祇園神を勧請し病氣平癒を祈願し、この祇園神を神輿にのせて巡行をしたことにはじまると伝え、やがて南の十町、北の六町が参加して神輿の巡行をする盛大な祭りとなりました。南の十町では10台の曳山が供奉したが、昭和13年の氷見町大火以降は5台となり、現在は太鼓台が神輿に供奉しています。北の六町では、大正期まで10mを超える立物（タテモン）と呼ばれる大きな人形を引き回していました。



石川県 <sup>ななおし</sup> 七尾市（旧能登島町） <sup>のとしま</sup> 能登島の秋祭り <sup>あきまつ</sup>

能登島ノ秋祭りは、9月第3日曜日の向田（コウダ）の伊夜比咩（イヤヒメ）神社から始まり10月19日の島別所（シマベッショ）の八昇（ハッショウ）社（別所神社）まで17日間に及びます。秋祭りは簡素な春祭りに比べ、実りの歓喜を表し、にぎやかに行われ、家には親戚、知人等を招いて酒食を共にし収穫に感謝します。

在所（集落）によって違いはありますが、秋祭りの1日の流れは、神社で神輿への神遷しの儀や宮祭りが行われた後、境内で奉納の獅子舞やにわか（芝居形式のもの）を演じます。その後、神輿が在所を巡行し、その年、結婚や出産、新築等のお祝い事があった家などからは神輿の招待を受け、庭先で獅子舞や「にわか」を演じます。映像は祭礼日順でダイジェストで流れます。



石川県 <sup>こまつし</sup> 小松市 <sup>ひきやま</sup> 曳山子供歌舞伎 <sup>こどもかぶき</sup> 小松 <sup>こまつ</sup> お旅まつり <sup>たび</sup>

小松市は、加賀三代藩主の前田利常（トシツネ）がその礎を築いた城下町です。利常は美術工芸や茶道など文化に造詣が深く、また産業も保護奨励したので、小松のまちはどんどん発展していきました。特に、利常が奨励した加賀絹の生産によって得られた豊かな経済力が江戸中期以降の「曳山子供歌舞伎」に代表される町人文化を大きく開花させました。

毎年20万人もの見物客で賑わう「お旅まつり」の見どころは、城下の町から町人のまちへと様相を変え、今日まで約240年もの間、住時の息吹を失わずドラマティックに、エネルギーに受け継がれてきた絢爛豪華な曳山の上で演じられる「曳山子供歌舞伎」です。（行事開催日：5月中旬）



石川県 <sup>わじまし</sup> 輪島市 <sup>ほうし</sup> 鳳至・河井の曳山祭り <sup>かわい</sup> <sup>ひきやままつ</sup> 皆月の山王祭り <sup>みなづき</sup> <sup>さんのうまつ</sup> 大沢曳山祭り <sup>おおさわひきやままつ</sup>

能登（ノト）では古くから曳山祭りがおこなわれ現在でも多くの祭りが継承されています。輪島市の中心部に位置する鳳至地区と河井地区では、御当組（オトウグミ）と呼ばれる厄男達が春祭りを取り仕切ります。桜飾りや人形で装飾された総輪島塗りの山車（ダン）が祭り囃子にのって市内を回りまじらや伊勢音頭が披露されます。（行事開催日：4月4・5～6日）

皆月地区の夏祭りは、山王祭りと呼ばれ五色の吹き流しや人形で飾られた山車が若衆達に曳かれます。夜には山車に約300個の提灯が飾られ、馬駆け神事が行われ祭りは最高潮となります。（行事開催日：8月10・11日）

大沢地区の夏祭りは、大きな傘鉾や人形吹き流しで飾られた山車を青壮年段が曳き廻し夜には奉納相撲が実施されます。（行事開催日：8月19・20日）



### 福井県 敦賀市 国指定重要無形民俗文化財 年占に福を呼ぶ 敦賀西町の綱引き

重要無形民俗文化財「敦賀西町の綱引き」は、「夷子大黒綱引（エビスダイコクツナヒキ）」と呼ばれ、毎年小正月に行なわれてきた年頭の予祝（ヨシユク）行事です。  
近世に市（イチ）が立ったといわれる西町通りに数百人の老若男女が群集し、東西に分かれて藁（ワラ）を巻いた太い綱を引きあいます。東は漁業神の恵比寿方（エビスカタ）、西は農業神の大黒方（ダイコクカタ）であり、いずれが勝つかによってその年の豊魚（東方）、豊作（西方）を占います。観衆も自由に参加でき、千切れた藁は縁起物として持ち帰ります。  
伝説されている恵比寿の面には慶長（ケイチョウ）2年（1597年）の銘があることから、400年以前には成立していたと推察されます。（行事開催日：1月第3日曜日）



### 福井県 敦賀市 刀根 気比神社の祭礼

福井県南東部、滋賀県に近いところに刀根地区があります。48世帯118人に減少しましたが、春・秋の祭礼が守り伝えられています。春は、4月第1日曜日に豊作を祈願する予祝行事として、子供が「桂の傘＝山の生命力」をかぶり、「桂の杖」を持ち、また、「わらの束＝稲の苗」を持って行列を神社まで進めます。これは、農作業の様子を演じる「田遊び」を意味しているといわれています。秋は12月の第1日曜日に、東座、西座の当番の家で、神を迎え、紅白の餅をついてこれを持って、子供たちを中心とする行列が、神社に向かいます。



### 福井県 勝山市 北谷町 木根橋につたわる報恩講料理

勝山市北谷町木根橋地区では、かつて、浄土真宗の宗祖親鸞聖人（シンランショウニン）のご恩に報いるため、そして農作物収穫への感謝の気持ちを込めて、1年で最も大切な行事として親戚や近所などたくさんの人を招いて、各家庭で報恩講（ホンコサン）を行っていました。  
しかし近年、高齢化・過疎化とともに報恩講をする家庭も少なくなり、だんだんと簡略化されてきているため、地域に伝わる報恩講料理を再現し、記録に残しました。  
“突き抜き”で作る「高まま」をはじめ、大豆を石臼（イシウス）で挽いた「じんだ和え」、荏胡麻（エゴマ）を使った「え一和え（アエ）」などの“取り菜（トリサイ）”（大皿料理）などを紹介します。



### 山梨県 甲府市 重要無形民俗文化財 天津司の舞

甲府市小瀬町（コセマチ）の鎮守である諏訪神社並びに天津司社に（テンツシヤ）に伝承されている天津司の舞は、わが国最古の人形芝居、特に偶人劇（グウジンゲキ）の始祖的存在と称され、古典的神事芸能として、また伝統芸能として高く評価されている日本民俗文化史上貴重な文化遺産です。昭和51年3月に、重要無形民俗文化財に指定されました。  
本映像は神事として行われる天津司の舞全体を映像化するとともに、その起源・背景にまで言及した映像です。スポーツ公園建設前の映像なので、ムラの原風景の中で行なわれているものであり、歴史的資料的な価値も高いものです。  
本作品は16mmフィルムからデジタル映像化しました。（行事開催日：4月10日前の日曜日）



### 山梨県 上野原市 上野原市の郷土芸能 ～上野原市指定無形民俗文化財～

上野原市の無形民俗文化財8件を紹介しています。冒頭の新町（シンマチ）と本町（ホンマチ）の祭囃子は、毎年9月5日に上野原地区の牛倉（ウシクラ）神社祭礼で披露され、山車（ダシ）が繰り出します。明治20年代に関東西部より伝来しました。次に登場する古在家（コザイケ）の神楽舞は毎年秋分の日前後の一晚、西原（サイハラ）地区田和（タワ）の招魂社（シヨウコンシャ）祭礼で奉納されます。山梨県でも数少ない神代神楽（ジンダイカグラ）の一種で、芝居・歌舞伎と結びつき演劇性が高いものです。鎌倉時代から伝わると言われています。最後に登場する獅子舞は桐原（ユズリハラ）・西原（サイハラ）地区の5つの集落に伝えられ、山梨県では珍しい一人立ちの三匹獅子舞です。伝承時期は不明ですが、いずれも埼玉県秩父地方が源流と伝わっています。桐原地区で10月第1土・日曜日、西原地区で9月15日前後の週末に行なわれます。



### 山梨県 富士河口湖町 県指定無形民俗文化財 河口浅間神社の稚児の舞

河口浅間神社に奉納する稚児舞（チゴノマイ）を地元ではオダイダイと呼び、太々神楽（ダイダイカグラ）だとしています。4月25日の例祭である孫見祭り（マゴミツリ）と7月28日の太々御神楽祭に7、8歳から12歳の少女10人ほどが奉納する華麗な舞です。毎年7月28日の太々御神楽祭に①御幣（ゴヘイ）の舞②扇の舞③剣の舞④八方の舞⑤宮めぐりの舞の順序で奉納されます。下方には、太鼓、鞆鼓（カッコ）各1、笛3人で中老男子が奉仕します。厳しい息ももりがあり、当日午前10時 舞子たちは白衣にちはや、陣羽織を着し、緋のたすきに緋のさしぬき、髪はし紙に環瑠（ヨウラク）をつけた清純な姿で神前に進み各舞を奉納します。舞の起源は諸説ありますが、富士山信仰が盛んであった江戸時代に登山に先立って奉納されたと伝えられています。



### 長野県 上田市 蘇民将来符～願いは永久に～上田市八日堂蘇民将来符頒布習俗の記録

蘇民（ソミン）信仰は、奈良時代以降に広く流布した民俗信仰で、全国各地に残存しています。信濃国分寺には、蘇民伝説を記した文明12年（1480）書写の牛頭天王之祭文（ゴズテンノウノサイモン）が伝わり、この頃には作られていたと考えられています。  
信濃国分寺は、聖武天皇の詔（ミコトノリ）により奈良時代に建てられましたが、平安時代末期には衰退し、中世には現地に移り、国分寺の伝統を継いでいます。毎月8日には金光明経（コンコウミョウキョウ）の読経があり、八日堂（ヨウカドウ）ともいわれ、特に1月7日～8日の縁日は蘇民将来符を求める人々で賑わいます。蘇民将来符は、講を形成する家系だけに作製・頒布の権利が継承され、蘇民将来符頒布習俗として記録保存を講ずべき選択無形民俗文化財に選択されています。



### 長野県 大町市 長野県無形民俗文化財 仁科神明宮作始め神事

この仁科神明宮作始め神事の映像は、仁科神明宮が主体となって、長野県及び大町市が補助をする形で平成6年に作成されたものです。仁科神明宮作始め神事が、平成2年に長野県無形民俗文化財に指定されたのを契機として、記録保存及び後継者育成、普及の意図に基づいて作られたものです。  
神事は、伊勢神宮の祈年祭（トシゴイノマツリ）にならって新暦3月15日に行なわれるもので、鎌初（クワハジメ）めから苗代（ナエシロ）づくり、種蒔き、鳥追いまでの稲作りの機微が神楽殿（カグラデン）内において繰り広げられます。記録の上では少なくとも中世永禄9年（1566）まで遡る歴史を有し、当時の農耕の姿を伝え、信仰の有り様を今に残し、大変貴重な映像資料として、さらにこの機会を通じて普及していきます。（行事開催日：3月15日）



### 長野県 <sup>いいやまし</sup> 飯山市 さつまおどり

長野県飯山市常盤（トキワ）地区小沼につたわる「さつまおどり」は、薩摩というはるか九州の地名がついた踊りです。その由来については色々な言い伝えがありますが、文献等がないためはっきりしたことは分かっておりませんが、主に、享保（キョウホ）以前に江戸から伝わったといわれています。江戸時代から大正にかけては付近の村々でも踊られていましたが、現在は小沼だけに残っています。

さつまおどりの特徴は、櫓歌（ヤグラウタ）と踊り歌が歌詞もテンポも全く別なものであるという、古い形式を残しています。特に櫓歌は複雑な形式をもっており、歌詞、旋律ともに古雅（コガ）で格調高い踊りです。（行事開催日：8月15・16日）



### 岐阜県 <sup>たかやまし</sup> 高山市（旧高根村） <sup>たかねむら</sup> 高根村のまつり

日和田（ヒワダ）祭りは一位森（イチイノモリ）八幡神社の例祭で8月12日、13日に行われます。笛や歌に合わせて舞う獅子舞は、信州・飛騨の他地域に類例を見ない雄1頭と雌2頭で舞うもので、「あくれ獅子」、「幕切れ」、「鈴の舞」、最後に「寝（ベンペ）取り」と続く神楽です。

黍生（キビユ）祭りは黍生八幡神社の例祭で8月第4土曜日に行われます。祭りの始まりをつける鶏闘楽（ケイトウラク）は飛騨地方でも珍しい小島毛（コトリゲ）で魔を払い場を清めるものです。妙見（ミョウケン）祭りとはよばれるお旅も行われています。

上ヶ洞（カミガホラ）祭りは道後神社の例祭で9月第1土曜日に行われます。祭りはダム建設により水没した元宮（モトミヤ）の参拝から始まります。奉納される神楽には子どもたちの役割がとて大きく、「子ども獅子」ではその勇姿が見受けられます。



### 岐阜県 <sup>たるいちよう</sup> 垂井町 <sup>いぶきじんじやれいさい</sup> 伊富岐神社例祭 <sup>おさたいこまつ</sup> 表佐太鼓祭り <sup>たるいひき</sup> 垂井曳ヤマ祭り

垂井町内に伝わる祭りを記録した映像です。伊富岐神社例祭は、村の豊作と安全を祈願する祭りで、神職による神事後、11の演目の神楽を奉納します。（行事開催日：4月）

表佐太鼓踊りは、南宮（ナングウ）神社に雨乞いの太鼓を打ち鳴らしたのが起源とされています。歌方（ウタカタ）の音頭に合わせ、直径1m、重さ50kgを超える太鼓を腹にくくりつけ、5つの踊りを太鼓を打ちながら踊ります。（行事開催日：10月）

垂井曳車山祭りは、3基のヤマ（注：ヤマの漢字は「車」偏に「山」と書きます）を町内に曳き回し、その舞台上で子供歌舞伎を演じます。本楽（ホンガク）では八重垣神社（ヤエガキジンジャ）での神前棒芸、3基のヤマのすりかすりなどが行われます。（行事開催日：5月2日～4日）



### 岐阜県 <sup>いびがわちよう</sup> 揖斐川町（旧春日村） <sup>かすが</sup> 春日の燈籠まつり

岐阜県の最西部に位置する春日村は、古来より正月に燈籠まつりを行っています。この祭りは修験道の影響を受けて伝えられました。精進潔斎をした禰宜は、薬師堂に供物を運びこれを捧げます。燈籠は五穀を象徴するものと考えられ、毎年制作されます。出来上がった燈籠は薬師堂に運ばれ、天井に吊られます。薬師堂では、村人が「しょんがいな節」を唄って待つうちに、燈籠が切り落とされ、村人はこれを奪い合い、一部を持ち帰って、この年の豊作を祈り、神棚に飾ります。（行事開催日：1月12日）



### 静岡県 <sup>しまだし</sup> 島田市 <sup>しずおかけん</sup> 静岡県指定民俗文化財 <sup>しいみんぞくぶんかざい</sup> 猿舞 <sup>さるまい</sup>

この映像は毎年4月14日に静岡県島田市東光寺日吉（ヒヨシ）神社の例祭で行われる「猿舞（サルマイ）」の様子を準備からまとめた映像記録です。

東光寺日吉神社の猿舞は元禄（ゲンロク）年間（1688～1703年）には舞われていた記録があり、300年以上の歴史があります。また、猿舞に似た踊りが南北朝時代の軍記物「太平記」に滋賀県大津市の日吉神社の猿楽として記述されており、猿楽の起源をうかがわせます。現在、日吉神社は全国に3000社以上ありますが、猿舞の伝承は他になく貴重なものとなっています。

東光寺地区の8歳から12歳の男子2人が日吉神社の神の使いとされる雄雌2匹の猿に扮して舞う姿は猿の愛らしくユーモラスな動きをよく表現しています。



### 静岡県 <sup>いわたし</sup> 磐田市 <sup>くにしていじゅうようみんぞくぶんかざい</sup> 国指定重要民俗文化財 <sup>みつてんじんはだかまつり</sup> 見付天神裸祭 <sup>まつ</sup> ～祭りの楽しさをあなたに伝えたい～ <sup>つた</sup>

旧暦の8月10日直前の土・日曜日に行われる矢奈比売（ヤナヒメ）神社（見付天神社）の大祭で、腰蓑（コシミノ）を着けた禪（フンドシ）姿の男達が、矢奈比売神社の拝殿や見付各所で乱舞することから、「裸祭」と呼ばれています。矢奈比売神社の祭神（サイジン）が、遠江国（トオトウミノクニ）の総社（ソウシャ）である淡海国玉神社（オウミクニタマジンジャ）へ渡御する際に行われます。古式の祭事様相を残していることから、平成12年12月27日に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

祭りの見所は、裸の練りと御輿（ミコシ）の渡御が行われる大祭初日の午後9時～翌日午前1時までの時間です。御輿の渡御に先立ち、腰蓑姿の男達が旧東海道の往來を練り歩き、矢奈比売神社へ向かいます。その後、灯火が消され、漆黒の闇の中、御輿の渡御が行われます。



### 静岡県 <sup>やいづし</sup> 焼津市 <sup>やいづかつおぶし</sup> 焼津鯉節

焼津は日本有数の鯉のまちで、古くから鯉節を製造してきました。現在では鯉節の製造は機械化が進んでいますが、昔ながらの製造方法を伝承するため焼津鯉節伝統技術研鑽会が昭和58年に発足し、鯉節製造の技術の伝承と研鑽が行われています。平成17年に焼津市の無形文化財に焼津鯉節製造技術が指定され、平成18年11月には「焼津鯉節」の商標権で地域ブランドを取得しました。

映像では生切り（ナマガリ）からカビ付けまでの、約半年かけて作られる昔ながらの鯉節製造作業の工程が記録されており、各作業のポイントの解説もされています。



### 静岡県 静岡市 (旧大河内村) 平野の盆踊り 昭和7年 昭和35年

昭和7年、静岡放送局が静岡市柚木(ユノキ)に開局された際、平野の盆踊りが招かれて出演し、その音曲が全国に向けてラジオ放送されました。その時の映像です。戦前の踊りの型を伝えており、また、当時の青年会の面々が映されており、今は亡き人々を思い出す映像資料としても貴重です。

昭和35年に安倍川(アベカワ)上流域の山村に伝承されてきた古風な盆踊りの様子を撮った映像です。少林寺(ショウリンイン)で盛んに踊られていた頃の雰囲気をよく伝えていきます。歌舞伎踊りの遺風を伝えるものとして、芸能史における評価は高いもので、男踊り、女踊り、中踊りなど踊りの型がよく記録されています。今は伝承されていない踊りもあり、貴重な映像です。

地元では現在、男踊りの後継者育成が課題となっており、本映像に残された型を、伝承に活用していきたいと考えています。本作品は16mmフィルムからデジタル映像化しました。



### 愛知県 岡崎市 (旧額田町) 夏山八幡宮 火祭り

火が祭りのテーマになっています。小滝に打たれて潔斎(ケツサイ)した若者が、古代からの火起しで火を探り、それを御神灯(ゴシントウ)とします。村の中に座す神々を一人一人読みあげてお招きし、その中で祭りが続けられます。あたりが暗くなる頃には、境内に作られた大粗朶(オオソダ)の山に点火され、その傍らにて鬼役、太夫役の若者が種々のかけあいをします。太夫に駄目押しされた鬼が火のついた棒杭をとり出し、観衆を追い払い、観衆は逃げまどいながらも火の粉をかぶると、その年は風邪をひかないと信じられ、喚声の中に日が暮れてゆきます。(行事開催日: 旧暦9月9日に近い日曜日)



### 愛知県 豊田市 足助祭り

足助祭りは、足助八幡宮の例祭で足助の馬鹿祭りとも呼ばれ、神輿と4つの町(町方)が出す山車、周辺の自治会(在方(ザイカタ)が出す200挺あまりの火縄銃の鉄砲隊、棒の手(ボウノテ)の警固によって盛大に行われます。

かつては、放生会(ホウジョウエ)や流鏑馬(ヤブサメ)等も行なわれ、在方からは数多くの飾り馬も出されてきました。4輦の山車は足助型と呼ばれる独自の形式をとり、高さが650cm前後ある。山車の製作年代は不詳ですが、宝暦12年(1762)に新町の山車で狂言が行なわれていました。ただ、足助の町は安永4年(1775)に大火に見舞われたため、その当時の山車が現在のもと同じかどうか不明です。(行事開催日: 10月)



### 愛知県 豊田市 とよたの祭り記録 四郷の棒の手

棒の手(ボウノテ)は農民の自衛の武術が五穀豊穡祈願のための奉納演技に変質していったものと考えられていますが、その起源は定かではありません。普通は素朴な檜の丸削り棒を用いますが、流派により太刀・槍・鎌なども使用します。尾張(オウリ)・三河国(ミカワノクニ)では古くから神社や寺の節句(セック)祭に奉納される献馬(ケンバ)を警固し、棒の手が奉納されていたことがわかっています。四郷(シゴウ)の手は猿投(サナゲ)地区に伝わる棒の手のひとつです。(行事開催日: 10月)



### 愛知県 幸田町 幸田の三河万歳

平成8年に国の重要無形民俗文化財に指定された「幸田の三河万歳」についての映像です。昭和52年に保存会を結成した人々が高齢化し、亡くなる方も出てきたので、幸田に伝わる三河万歳の原型を映像記録として保存しました。その一部を小学生向けにまとめたのが本作品です。

三河万歳のルーツといわれる愛知県西尾市実相寺(ジッソウジ)の応通善師(オウツウゼンシ)の木像や、古い文書の映像もあります。また、伝統的な御殿万歳(ゴテンマンザイ)だけでなく、正月に福の神がやってきて悪事災難をのぞいてくれるという御門開き(ゴモンビラキ)、庶民のために演じられ現代の漫才のルーツとなったといわれる三曲万歳(サンキョクマンザイ)なども収録してあります。さらに、保存会のお年よりが小学生に万歳を教える場面、海外での公演などもあります。



### 三重県 津市 (旧美里村) 高座原 山の神事

毎年正月明けの日曜日早朝、山の神事が行われます。この神事は五穀豊穡・無病息災を祈って垂仁天皇の昔から行われていると伝えられています。まずご神体となる、男股、雌股を山から木を切り出して制作します。次いで、かがり火となる「オクラカシ」や「ゼンツナ」をくみ上げ、また、「ウツギの木」の膳や「オトシダマ」なども作ります。やがてご神体の前で神事が執り行われ、オクラカシに点火されます。村人はこのオクラカシの火で、餅を焼いたりして1年の収穫と息災を祈ります。



### 三重県 熊野市 木本神社 木本祭り 熊野市木本町に伝わる六方行列 熊野市無形民俗文化財

木本神社は、熊野市の東、太平洋に臨む木本町に、慶長13年(1608年)にこの地に遷座しました。本殿は10年に1度屋根を葺き替え、本殿は20年に1度建て替えています。また、鎌倉時代の一木造の狛犬が残されているなど、由緒ある神社です。毎年、神輿の渡御に付き添う形で、「六方行列」が進みます。六方行列の主人公は中学1年から中学3年の男子です。六方行列保存会によって準備された道具を持って大名行列のごとく行列は進みます。道具は、はさみ箱、シャグマ、鳥毛、薙刀、槍、立て傘、台傘、弓、鉄砲、天目となっています。



### 滋賀県 近江八幡市 ~湖国に春を呼ぶ~ 火祭り行事 左義長

近江八幡市は、琵琶湖の東にあり、1585年、羽柴秀次がこの地を拓きました。多くの名所旧跡がありますが、もっとも有名なのは、三大火祭りの1つとして、日牟礼八幡宮(ヒムレハチマングウ)の左義長です。左義長は邪気をはらいよい新年を迎えるための祈りを込めた、若衆の祭りです。目玉となる部分は前年より若衆が作り、台の部分は大人たちが作ります。左義長は、各地域ごとに若衆が担ぎ、町内を練り歩き、やがて神社境内にて点火され、祭りは最高潮となり盛り上がりを見せます。





滋賀県 <sup>あづちょう</sup>安土町 <sup>けいしやう</sup>継承される民衆の祭り <sup>みんしやう</sup>沙沙貴まつり <sup>ささき</sup> ~ 滋賀県安土町 <sup>しがけんあづちやう</sup>沙沙貴神社 ~

この安土町には、平安時代以前より、沙沙貴神社が祭られています。ご神体は「大毘古神（オオビコノミコト）」「少彦名神（スクナヒコナ）」「仁徳天皇」「宇多天皇・敦實親王（アツシシノウ）」です。特に宇多天皇と親王は佐々木源氏の祖といわれています。沙沙貴神社では、江戸時代から、さまざまな行事が行われてきましたが、その一部が今日まで受け継がれています。3月、「満寿（マンジュ）」と呼ばれる、42歳を過ぎた男子が中心となって、綱打ちが行われ、手桶綱など、複雑な結びが披露され、伝承されています。また、葎（アシ）を刈って、これを束ね大松明がつくれます。大松明は街中を引き回され、沙沙貴神社にお参りした後、広場に引き出され、五穀豊穡、家内安全を祈願して点火されます。その後、3台の神輿がひきだされ、決められた順序で「みこしの舞」を始めます。（行事開催日：4月・5月・10月）



大阪府 <sup>かわちながのし</sup>河内長野市 <sup>よみがえ</sup>甦る古民家 <sup>かわちながのし</sup>河内長野市 <sup>きやうかじたにけじやうたく</sup>旧梶谷家住宅

河内長野市は大阪府南東部に位置し、歴史・自然環境に恵まれていています。市域の山間部にある滝畑（タキハタ）地区の伝統的民家は、妻入（ツマイ）りの滝畑型民家として知られています。この地区は昭和56年のダム建設によって地区の半分以上が水没しましたが、この時、現在市の文化財に指定されている梶谷家住宅が移設復元され、左近家（サコウケ）住宅は重要文化財に、指定されています。しかしこのような伝統的民家の茅葺（カヤブキ）屋根は、維持が難しくなって鉄板に覆われるようになり伝統的な葺き替えが行われなくなってきています。今回、移築した梶谷家住宅の修理を実施し、その過程で行われる伝統的な屋根葺き技術を記録しました。合わせて全国的にも稀少となった当地区の岩湧（イワキ）山の茅場で茅刈りや火入れも記録しました。



大阪府 <sup>かしわらし</sup>柏原市 <sup>かしわらし</sup>柏原市の神話・民話

日頃何気なく見ている神社やお寺、何気なく歩いている道には何か謂れがあります。柏原市の神社やお寺、井戸や道にも謂れがあります。弘法大師が杖を突きそこを掘ると水が湧き出たとされる井戸、悪さをする雷を井戸に閉じ込めた観音様、旱魃（カンバツ）時に雨を降らせる竜王（ジョウ）さんです。また、「日本書紀」に謂れを見つけることもできます。垂仁（スイニン）天皇に白鳥を献上した天湯河板拳（アメノユカワタナ）をお祀りする神社。取り替えた馬が埴輪になってしまうという出来事に遭遇した田辺史伯孫（タナベノフヒトハクソン）をお祀りする神社です。この映像を通じて、全国の皆様に住んでおられる地域あるいは生まれ故郷に興味を持っていただけると幸いです。



兵庫県 <sup>みなみ</sup>南あわじ市 <sup>あわじにんぎやうじやう</sup>淡路人形浄瑠璃

財団法人淡路人形協会では、約500年の歴史がある淡路島の誇り・淡路人形を後世につなげるために、地元に住民にまず知ってもらおうと活動していますが、淡路人形浄瑠璃をまったく知らない若い世代にその魅力を感じてもらうため、まず、子どもたち向けに淡路人形座が淡路人形浄瑠璃の出張講座を実施しています。

- ・淡路人形浄瑠璃の代表作の1つ「絵本太功記」十段目尼崎の段、十次郎の物語の上演。
- ・太夫の道具類、姿勢、発声法、人物の年齢や性別、感情などによる語り分け。
- ・三味線の材質、種類、構え方、撥（パチ）の持ち方、状況・情景の描写などの説明。
- ・三人遣いの人形のかしらの説明、人形の構造、遣い方、感情表現の方法。
- ・代表の子どもによる人形遣いの体験。



奈良県 <sup>かしはらし</sup>橿原市 <sup>ならけんむけいみんぞくぶんかざい</sup>奈良県無形民俗文化財 <sup>まつり</sup>すずつけ祭

毎年節句のの前日に橿原市地黄町（ジョオチョウ）で行われる、子供の健康と豊作を祈願する伝統行事です。5月4日の夕刻、村中の子どもがパンツ姿で鐘を合図に飛び出し、各家から集めて油で練ったすずを持った大きい子どもが追いかけて、すずを塗り付け、最後に人麩（ヒトマロ）神社の境内に行き、ここで最後のすずのつけあいをして終わります。黒くなるほうが健康になるといわれています。

風呂に入ってきれいになった子どもたちは、世話人の家（当家屋（トウケヤ））で泊まり、翌朝早く野神塚（ノガミツカ）へ参拝します。前日作った絵馬や大きな菓（ワラ）の蛇・酒・塩・海産物・農産物を供えて健康と豊作を祈ります。



奈良県 <sup>かしはらし</sup>橿原市 <sup>のがみんじ</sup>農神神事 <sup>まつり</sup>シャカシャカ祭り

橿原市の上品寺町（ジョウボンジチョウ）で6月5日に行われる農神祭です。7歳から15歳までの子ども達が学校から帰るとムギワラまたは菓（ワラ）2束を持って自家の家へ集まります。当家（トウケ）は長男の生まれた家がつとめることになっていますが、現在は子どもの数が減り、総代（ソウダイ）が当家をつとめます。

当家の家では長さ10尺、径8尺位の蛇をムギワラで作り、子どもがそれを担いで北の池まで練り歩き、「水を吞ませてやる」といって池につけた後、農神（ノウシン）さんの木にそれを巻きつけ、神酒（オミキ）と粽（チマキ）を供える。これがすむと、子ども達は当家で風呂に入り、膳を振る舞われます。



奈良県 <sup>かしはらし</sup>橿原市 <sup>ならけんむけいみんぞくぶんかざい</sup>奈良県無形民俗文化財 <sup>ひまつり</sup>ほうらんや火祭

橿原市東坊城町（ヒガシボウジョウ）の八幡（ハチマン）神社、春日（カスガ）神社で8月14、15日に「ほうらんや」と称する火祭りが実施されます。

14日夕刻、川端（カワバタ）地区の旧家より宵松明（ヨイタイマツ）が八幡神社へ奉納され燃やされます。翌15日は朝から各地区の氏子（ウジコ）ごとに奉納する松明作りがおこなわれます。大きなものは高さ3m、直径2m、重さ500kgもあります。午後1時からは春日神社で6個の松明が、午後3時からは八幡神社で10個の松明が燃やされます。火がついた松明は氏子が担いで境内を3周され神前におさめられます。旧盆に行われる珍しい火祭りであることから県の無形民俗文化財に指定されています。



和歌山県 <sup>ありだし</sup>有田市 <sup>すさじんじや</sup>須佐神社の獅子舞

有田市千田に鎮座する須佐神社の祭礼は、「千田祭（チダマツリ）」ともよばれ、毎年10月13日・14日の2日間にわたっておこなわれる有田地方随一の祭です。この祭は、その気風から「千田のけんか祭」ともいわれ、大神輿の渡御や鯛投げ神事などに荒々しさを見ることができます。祭りで奉納される獅子舞は、天狗・鬼が獅子をあやす芸能で、祭りの重要な箇所に登場して、神幸行列を進行させます。



### 和歌山県 印南町 印南八幡の重箱獅子と祭

印南八幡の重箱獅子は、毎年10月1日・2日の印南八幡神社の例大祭（印南祭）で、最初に演じられる獅子舞で、東山口地区で伝承してきました。  
笛や太鼓なども伴奏もなく、2匹の鬼が踏みしめる反問（ヘンバイ）とささらの音だけが響き、銚をさした鬼と獅子が長いあいだ静かに対峙する様子が、この芸能の特徴です。このほか、印南川の河口を渡って御旅所に渡る「川渡御」も、この祭りの大きな見せ場となっています。



### 和歌山県 日高川町（旧川辺町） 紀道神社の頭屋獅子

日高川町三百瀬（ミヨセ）に鎮座する紀道神社の秋祭（紀道祭）は、現在は10月の体育の日の前日（日曜日）に執行されます。この祭りは、4つの青年団組織（若中）によって運営され、御旅所での行事で、毎年若中ごとに当番が回る「頭屋獅子」が演じられます。このほか、四ツ太鼓、屋台、山車が神賑行事として奉納され、勇壮な駆馬行事によって祭りがしめくくられます。



### 島根県 益田市 益田糸操り人形公演 絵本太功記 十段目（尼崎の段）

益田糸操り人形は、東京浅草で糸操り人形芝居を興行していた山本三吉（サンキチ）が、明治20年頃益田に至り、浄瑠璃の愛好家の集まり「小松連（コマツレン）」を迎えられたことに始まります。  
義太夫節（ギダウブシ）による糸操り人形の形態を今に残し、丈（タケ）約70cmの人形の各所に10数本の糸を結び付け、遣い手（ツカイテ）が高さ約2mの歩み板の上から「四つ目」と呼ばれる手板を使って操ります。人形の中には大阪文楽座の人形師大江定丸の銘の入った三番叟（サンバソウ）の頭も伝わっています。  
現在も「益田糸操り人形保持者会」によって島根県芸術文化センター「グラントワ」等で公演を行い、古い形を留めたまま上演されている操り人形芝居としては全国でも唯一といわれています。島根県有形・無形民俗文化財指定。（行事開催日：7月14日・9月17日・12月1日・3月9日）



### 岡山県 新庄村 新庄盆踊り

盆踊りの全盛期は、今から300年ほど前だとわれ、新庄村の盆踊りもこのころ始まったと考えられています。旧出雲街道の宿場だった新庄村は、各地の踊りが伝えられたとされています。かつては3日間にかけて踊られていましたが、現在はお盆の夜1日だけ、がいせん桜通りで踊られています。新庄村の盆踊りには、てんがらこ、まんま、小大寺（コダイジ）、東（ヒガシ）、早備前（ハヤビゼン）の5つの踊りがありますが、それぞれが軽快で親しみやすく、誰にでも比較的簡単に踊ることができます。太鼓が先導し、後から踊り手が続き、がいせん桜通りを踊ります。



### 広島県 廿日市市 説教源氏節人形芝居

説教源氏節は、新内（シンナイ）に江戸説教節を加味したもので、天保7年（1836年）頃に大阪の新内語りの太夫、岡本美根太夫（ミネダユウ）によって始められました。新内の優婉（ユウエン）な語り口と説教節の哀切な節回しが調和して、人々の心に大きな感動を与えます。  
この説教源氏節は、名古屋を中心に全国的に大盛況でしたが、時代とともにその姿を消していき、現在伝承されているのはこの跳楽座（チョウラクザ）と、もう1か所だけとなりました。廿日市には1880年頃約120年前に伝わり、「でこ」と呼ばれる操り人形使い、舞台装置を作り、上演するなどして、技能の伝承に努め現在に至り、広島県無形民俗文化財に指定されました。この映像の外題は、有名な「小栗判官（オグリハンガン）伝説」を扱った「小栗判官・照手姫（テルテヒメ）」の一幕です。



### 広島県 海田町 海田新町頂載

「頂載（チョウサイ）」とは、熊野神社秋季例大祭（クマノジンジャシュウキレイタイサイ）に奉納される、山車のことです。約1.8m四方の屋台に直径21cm、長さ約13.5mの杉丸太を通した巨大なもので、重さは2.5tあり、これを50～60人で担ぎます。新町（シンマチ）を出発し、2日間町内を練り歩き、熊野神社に奉納されます。約200年前から続く行事とされ、かつては町内に4台ありましたが、現在では新町の1台のみとなっています。（行事開催日：10月上～中旬）



### 山口県 岩国市（旧美和町） 生見八幡宮の秋祭り ～金山神楽と金山獅子舞～

稲の収穫が終わった10月末、美和町生見に鎮座する生見八幡宮の秋の例大祭が盛大に執り行われます。美和町の北部生見川の両岸に位置する生見・中山周辺の集落の総鎮守として古くから信仰を集めているのが生見八幡宮です。本祭に先立ち、前夜祭として周辺の部落から提灯行列と、保存会による神楽が奉納されます。神楽は美和町内の金山神楽保存会と山代白羽神楽保存会によって毎年交替で舞われます。一方の獅子舞は25年に1回、翌日の本祭に奉納されます。田んぼで眠っている書虫を起こして田んぼから追い出すといった一連の動作を表現したものです。本作品では2005年の例大祭での金山神楽保存会による神楽「神戸の開き」「煤はき」「恵比寿」「柴鬼神」「大江山」「八岐大蛇（ヤマタノオロチ）」と、本祭の獅子舞を収録しています。



### 山口県 美祢市 岩戸の舞

この舞いは、美祢市西厚保町（ニシアツツョウ）に鎮座する原八幡宮（ハラハチマンガウ）へ奉納する舞いです。江戸中期、大凶荒（ダイキョウコウ）と悪疫（アクエキ）流行し、村民が五穀豊穡無病息災祈願のために、出雲に行き、この地に伝わる舞の伝授を受け、帰郷後村民に教え、毎年11月7日、例祭の夜八幡宮神前に奉納し、現代にいたったと伝えています。内容は、神話「天の岩戸開き」の故事（コジ）にちなむ舞で、夜間、神前方三尺の範囲、四方に舞納め、奉納者は地区の男子で、服装は舞子・奏楽者とも白装束・烏帽子（エボシ）・白足袋（シロタビ）を着用します。天蓋（テンガイ）に続く舞いは、掛歌・三拝（サンバイ）神楽、神楽の舞・櫛の舞・刀の舞・火ともしの翁（ジイ）・床（トコ）ならし・姫宮（ヒメミヤ）の舞・神那岐（カンナギ）の舞・巫女（ミコ）の舞・手力男（タチカラオ）・弓の舞と12番に分かれ、2時間にわたって奉納され、太鼓・笛・合わせ鐘（カネ）によって奉納されます。



### 徳島県 美波町（旧日和佐町） 山河内彦之進音頭と芸題踊り

西暦1818年頃、彦之進（ヒコノシン）という人が音頭を作詞作曲して、四河内（ヨンガワチ）（奥河内、北河内、西河内、山河内）の人々に振り付けたものであり、先祖の霊を慰める精霊（ショウリョウ）踊りとして始められたものだと言われています。音頭は彦之進音頭、踊りは芸題（ゲダイ）踊りといひ美波町の無形民俗文化財（昭和36年踊り、昭和46年音頭追加指定）となっています。芸題として「傾城（ケイセイ）阿波の鳴門巡礼別れの場」と「牛若丸と弁慶」、「ごんべの種まき」などがあります。本来は旧暦盆の20日夜、打越寺（ウチコシジ）の境内で音頭にあわせて踊っていましたが、近年は新暦14日の夜に打越寺大師堂（タイシドウ）前の広場にて踊っています。



### 徳島県 海陽町（旧穴喰町） 八坂神社祇園祭り

穴喰の八坂神社は、古くから日本三祇園（サンギオン）の1つといわれ、鎌倉時代の頃から京都、備後鞆、穴喰の3ヶ所にある八坂神社を日本三祇園と呼び、早くより世の崇敬するところでありました。八坂神社の祇園祭は毎年7月16日が宵宮（ヨイミヤ）17日が本宮（ホンミヤ）です。本宮当日には御輿渡御（トゴヨ）があり、御旅所の戎（エビス）神社まで渡御し、少しの休憩後、本宮まで還御（カンギョ）します。その際に子供達によるお能の舞が奉納されます。先やりの舞、八ツ橋の舞、獅子舞の舞です。そのお供として団尻（ダンジリ）の巡行があり、金幣仲、商人仲（アキンドナカ）、鷺住仲の3台と関船が続きます。また、山鉾（ヤマホコ）の巡行もあるが、これらは久保筋（クボスジ）だけの道筋を引き回すのです。団尻・関船・山鉾の組織は地域のほか職能が関係している特異性があります。



### 香川県 高松市（旧香川町） ひょうげ祭り 香川町 浅野 香川町ひょうげ祭り保存会

高松市指定無形民俗文化財で、全国屈指の奇祭ひょうげ祭りの準備の様子から、祭り本番までを記録した映像です。江戸時代に水不足解消のため新池を築造した矢延平六（ヤノベヘイロク）の徳を偲び、水の恵みに感謝し、豊作を祝う行事として始められた祭りで、毎年9月の第2日曜日に香川町浅野地区を中心に開催されます。この祭りの特徴は、神輿のおさがりに使われる神具や供侍（トモザムライ）の衣装が農作物や家庭用品を中心に作られており、色鮮やかなメーキャップをした供侍が、新池までの約2kmをひょうげながら練歩きます。ひょうげとは、おどけるとか滑稽という意味で、ひょうげ祭りという名もここからつけられたものです。



### 香川県 さぬき市 さぬき市ぐるっと文化財 ～筒野の虎獅子～

さぬき市大川町富西田（トミニンダ）には、「筒野の虎獅子」と呼ばれる虎そっくりの頭（カシラ）を使う獅子舞があります。筒野の虎獅子は、言い伝えや古文書によると、160年前にこの地方で酒造りをしていた向井家（ムカイケ）の何代目かの当主である向井孫七（マゴシチ）が当時流行していた近松門左衛門（チカマツモンザエモン）の国姓爺合戦（コクセンヤガッセン）の虎退治の獅子舞に惹かれ、私財を投じて用具を整え、若者たちを集めて練習したのが始まりと言われています。和唐内（ワトウナイ）に扮した武者姿の少年が、荒れ狂う虎を手を持った扇子1本で操り、取り鎮める場面はこの虎獅子のなかでも見せ場です。地域の祭りには、この勇壮な獅子舞が奉納され、地元の人々によって受け継がれています。さぬき市指定無形民俗文化財に指定されています。（行事開催日：10月1・2・10日）



### 香川県 小豆島町 中山農村歌舞伎「小豆島」

中山農村歌舞伎は、江戸時代後期からの小豆島で円上演されていた農村歌舞伎のうち、今日まで残った2つの内の1つで、香川県指定の無形民俗文化財に指定されており、毎年10月上旬に4幕程度上演されています。また、上演される茅葺き（カヤブキ）舞台（中山の舞台）は、重要有形民俗文化財に指定されています。今回上演された「小豆島」は大正時代に東京や大阪の歌舞伎場で上演されていた根本（ネホン）を基に、小豆島で初めて演じられたものです。物語は、南北朝時代の武将佐々木信胤（ササキノブタネ）がおオの局（オサイノツボネ）とともに小豆島に駆け落ちし暮らしていたが、ある日、信胤が仇（カタキ）になることが判り、周りから毒殺を促され実行するが、おオの局自らも毒を服し、後を追うという悲恋物語です。



### 福岡県 春日市 国選択無形民俗文化財 春日の婿押し

1995（平成7年）に国指定重要無形民俗文化財となった「春日の婿押し」（若水祭（ワカミズサイ）は春日地区に伝わる年中行事で、春日神社で正月14日に行われています。春日神社の氏子で組織された三期組合が中心となり、前年に結婚した新郎新婦を祝福する行事です。行事の1つである「樽（タル）せり」は神社前の池の中で男達が樽を割り奪い合うもので、その姿は勇壮で全国的にも有名です。



### 福岡県 <sup>なかがわまち</sup> 那珂川町 <sup>かみがみ</sup> 神々にいだかれて <sup>なかがわまち</sup> 那珂川町 <sup>いわとかぐら</sup> 岩戸神楽

この神楽が代々伝わってきた、那珂川町大字山田は神宮皇后に関する種々の伝説を持つ地域です。神楽の沿革は、明瞭を欠くが、関ヶ原の戦後の黒田長政が筑前入りした以降と伝えられています。明治維新までは、神官によって舞われていましたが、廃藩置県に伴い明治13年に吉次飛騨守(ヨシツグヒダノカミ)、酒井出雲守(サカイイズモノカミ)によって山田村の氏子に伝承されたものです。神楽の命和理(ミコトワリ)(曲目)は、全18番で、神の降臨等を願う捕り物神楽(トリモノカグラ)と神話を再現した面神楽に大別されます。神楽舞は、毎年7月14日の祇園祭の夜であり、特に鬼舞荒神(アラカミ)・問答では、この鬼に抱かれた子供は丈夫に育つといわれていることから、乳飲み子を連れ来たたくさんの人たちでにぎわっています。



### 佐賀県 <sup>からつし</sup> 唐津市 <sup>からつ</sup> 唐津の「亥の子」

亥の子まつり:唐津市北波多上平野(キタハタカミヒラノ)地区に伝わる亥の子まつりは、旧暦10月の亥の日に行なわれます。明治末期頃までは各地区で亥の子石を搗(ツ)いてまわっていたが、次第になくなり、現在では上平野地区ただ1箇所だけ今にその行事を伝えています。1番亥の子の時は男児の出生を喜び、2番亥の子の時は女児の出生を喜んだとされています。亥の子石を持った児らは地区の各戸を廻り、祝歌を歌い、石搗きをします。猪ノ子綱引き:唐津市鎮西町上場(チンゼイマチウワバ)に伝わる亥の子綱引きは、豊臣秀吉の朝鮮出兵の時、地区の人達の士気を高めるためと10月の亥の日収穫を祝う行事として行なわれてきました。農業用綱を60本~90本よりあわせて径60cm、長さ60mを2本作り、中央で結び合わせて総延長100m程度の綱を作ります。神事後、上組と下組に別れて引きます。現在は花火を合図に3回行なわれます。(行事開催日:11月第2土曜日)



### 佐賀県 <sup>からつし</sup> 唐津市 <sup>からつし</sup> 唐津市伝統文化伝承事業

海中盆綱引き:豊臣秀吉が朝鮮出兵の際、将兵に軍船のとも綱を曳かせたのが始まりです。満潮時に太さ直径30cm、長さ30mの綱を太鼓の合図とともに海中に飛び込み3回引きあいます。小川島鯨骨切り唄:小川島伝承されている鯨唄(鯨切り唄、ろくろ巻き上げ唄、鯨お唄い)と呼ばれる労働歌です。広瀬浮立:古風な鼓の打ち方である「ねじり囃子」、神の前ではリズムに緩急のある特徴的な太鼓の演奏をします。蕨野浮立:大山住神社(オオヤマズミジンジャ)へ五穀豊穡を祈願して、彼岸の中日に蕨野浮立を奉納します。鳥巢天衝舞浮立:鳥巢天満神社に着くまで行列は曲に合わせて浮立を行い、境内で天衝舞を奉納します。納所ガメ踊り:住吉神社の秋祭りに奉納される踊りで、男女の顔を描いたコマをまとい、山ばやしに合わせて軽妙に踊ります。唐津くんち:唐津神社の秋季例大祭において神輿神幸に伴い、お旅所の西の浜及び町まわりに14台の曳山が巡行します。



### 佐賀県 <sup>とすし</sup> 鳥栖市 <sup>ゆうきゆう</sup> 悠久の時を経て、未来へ。 <sup>みらい</sup> 四阿屋神社 <sup>あずまや</sup> 四阿屋神社 <sup>おんたまい</sup> の御田舞

豊作を祈る御田舞祭の一種で、田植えの諸作業を芸能化したものです。かつては養父郡惣社(ヤブゲンソウシャ)四阿屋神社の4月1日の神幸祭に奉納されていましたが、現在は秋の行事となり、例年10月20日前後の日曜日に鳥栖市蔵上(クラノウエ)町の老松(オイマツ)神社境内で行われます。御田舞は3間四方の仮設舞台の上で、長(オサ)・座奉行・申立(イイタテ)・種蒔・代踏(シロフミ)・田童(トウド)・田打・鬼・鼓・太鼓・先払い・手すきなど総勢30人以上の男性が、「申立」「田打」「種蒔」「代踏」「鬼」「雨降り」の順序で演じます。木鐸を持った田打の所作、代掻棒を持った代踏の優雅な舞、早乙女姿の田童のあどけないしぐさ、鬼の勇壮な舞など、古式ゆかしい田植えの舞として貴重なものといえます。



### 佐賀県 <sup>たけおし</sup> 武雄市 <sup>だい</sup> ふるさとのまつり <sup>だいにち</sup> 大日の皮浮立 <sup>かわふりゅう</sup>

皮浮立は佐賀県有明沿岸地域を中心に広く分布し、大小の太鼓を主体とする芸能で、通常は笛3人、締太鼓(モリヤーシ)3人、鼓3人、大胴1人というように、10人前後で演奏します。鉦(カネ)浮立と組み合わせで奉納されます。皮浮立はリズムカルでテンポも速く、きびきびとした男性的な魅力があり、見物人をひきつける囃子が特徴です。皮浮立は単調なリズムになりやすいのですが、大日の皮浮立は笛→締太鼓→大胴→笛とリード役が移動する特徴を持ち、変化に富みます。加えて「皮浮立」の決め手である撥(パチ)の切れにも出色(シュツショク)の冴えがあり、佐賀県下の皮浮立の中でもひととき目立つ存在です。毎年祇園(7月)の時期には大日社(ダイニチシャ)で彼岸(9月)の頃には潮見神社にて奉納されます。(行事開催日:7月28日)



### 長崎県 <sup>いさはやし</sup> 諫早市 <sup>ながさきけん</sup> 長崎県指定無形民俗文化財 <sup>たゆいふりゅう</sup> 田結浮立

県下に数多い総合浮立の中でも最も多彩な種類を持つ芸能で、垣踊り(カキオドリ)須古踊り(スコオドリ)、蛇踊り、月の輪、道具廻し、掛打ち(カケウチ)、狐踊り(キツネオドリ)、銭太鼓(ゼンダイコ)、薙刀踊り(ナギナタオドリ)など、室町時代末期の面影を残す垣踊りから、江戸時代中期の笛の曲を持つ行列の芸が組み合わせられ伝承されています。各芸能はそれぞれ特色を持つが節度ある芸能を伝えており、これらを総合することにより、歴史的にも、県内の芸能分布上においても貴重な存在であることから、昭和55年に長崎県無形民俗文化財に指定されました。3年に1度、8月の最終日曜日に「本踊り」が開催されます。



### 長崎県 <sup>ひらどし</sup> 平戸市 <sup>ひらどし</sup> 平戸市指定無形民俗文化財 <sup>つきじちよう</sup> 築地町のジャ踊り <sup>おど</sup>

築地町のジャ踊りは毎年10月24日~27日まで行われる「亀岡神社例大祭」中25日の「御神幸」で披露されています。地元ではこの例大祭は「平戸くんち」としてしまわれ、市街地は祭り一色の雰囲気につつまれます。起源については明らかでなく、江戸時代からという言い伝えはありますが、確かなところでは、明治13年亀岡神社遷宮祭に奉納されていることから少なくとも100年にわたり伝承されていることとなります。(行事開催日:10月25日)



長崎県 つしまし かみあがたまち いなさく あや か な て ほんちゆうしんぐら うしわかまる  
**対馬市 (旧上県町) 稲作おどり・綾きり・仮名手本忠臣蔵・牛若丸**

上県町の3地区に伝わる6つの民俗芸能を紹介しています。  
 綾きり(瀬田地区): 起源は江戸初期から中期といわれ、厳原港から今里村までの名勝・難所を歌ったもので、歌と太鼓の囃子に合わせて、6人が踊ります。  
 仮名手本忠臣蔵: 赤穂浪士の討ち入りを室町時代に時を移して脚色した全10段からなる踊りです。  
 綾きり(港地区): 港地区の名勝を歌った歌と太鼓の囃子に合わせて、14人が踊ります。  
 牛若丸(港地区): 母の常磐御前が現れて、恨みを晴らしてほしいと言った踊りです。  
 佐々木蔵流(港地区): 佐々木蔵流が遺恨を晴らそうと、吉岡太郎左右衛門を闇討ちするという語りに合わせて踊ります。  
 稲作踊り(榎田地区): 江戸時代に始まったと伝えられ約300年の歴史があります。土地を耕すところから、米を精米するところまでを江戸時代の農具・民俗衣装で再現した踊りです。



やつしろし やつしろし でんとうげいのう  
**熊本県 八代市 八代市の伝統芸能**

二見州口町雨乞い踊り: 江戸時代の中ごろ、八代市植柳(ウヤナギ)方面から州口地区に伝わってきた郷土芸能です。干ばつ  
 のとき、雨乞祈願として州口町竜宮神社に五穀豊穡と家内安全を併せてお祈りする踊りです。  
 おざや名所: 天草の阿村(アムラ)のお菊さんと現場監督のだいぼんどの悲恋物語がおり込まれ、軽快なリズムに合わせた面白  
 い囃子とともに踊りが繰り広げられます。  
 榎木神楽: 1800年ころに始まり、毎年10月25日の榎木神社大祭で、五穀豊穡に感謝し奉納されます。お神酒を飲み交わ  
 しながらの舞、鬼神の面をつけての舞など、数多く伝えられています。  
 芝口棒踊り: 今から120年くらい前、収穫祭や農村の娯楽として伝えられたといわれています。  
 鶴喰地区棒踊り: 文政13年(1830)、鶴喰地区の観音堂設立にあたって奉納されたのが始まりとされています。  
 銭太鼓: 天明年間、村の百姓たちは竜峯山(リュウホウザン)に登り3日3晩願いを込めて雨乞い太鼓を打ち鳴らしました。  
 満願の日、人々は、天の神に感謝し、一文銭を5~6個入れた竹筒を振りながら舞い踊ったのが始まりといわれています。



やまがし きくかまち れきし ろまん いろど きくかまち きょうどげいのう  
**熊本県 山鹿市 (旧菊鹿町) 歴史と浪漫に彩られた 菊鹿町の郷土芸能**

熊本県の北端に位置する菊鹿町は涼をもとめ夏は賑わう豊かな自然、素朴な風土、貴重な歴史が残る町です。そこに残る6  
 地区の様々な伝統芸能を紹介しています。「大林(オオバヤシ)神楽」は18代にわたり継承されてきた剣舞4座の奉納神事です。  
 「大田(オオダ)神楽」は、明治初期から始まり、子供神楽で復活継承された氏神への奉納神楽です。「相良(アイラ)神楽」は、  
 200年の伝統を誇る剣舞です。「相良雨乞い踊り」は、踊りの輪のなかで男性がこっけいな動きで笑わせる伝統芸能です。「木  
 山羽熊振り」は、1200年の歴史をもつ松尾神社で、25年に1度行われる奉納神事で単調であるがゆえに動作は厳しい行列  
 舞です。「阿佐古かせいどりうち」は、子供たちが顔に墨を塗り神に扮し全戸を回り、豊作と家内安全を住民に与えていく行  
 事です。



きくようまち ばばぐす ししまい おほうし  
**熊本県 菊陽町 馬場桶の獅子舞 ~御法使まつり~**

お法使まつりの神事の際に舞われるのが馬場桶の獅子舞です。お法使まつりとは、毎年10月30日に行われる津森(ツモリ)  
 宮の祭りで菊陽町益城町(マシキマチ)、西原村(ニシハラムラ)の12地区で、各地区が1年間オホシサンと呼ばれる御身  
 体を祀り次の地区へ渡すものです。この祭りの特徴は、御輿を受け渡し場所へ運ぶ途中に地面に投げたり、転がしたりする事  
 です。獅子舞は馬場桶地区にだけ受け継がれており、重厚な獅子頭を持ち、獅子楽に合わせて前後2人で舞う勇壮な舞です。  
 舞手の他に、玉取り(タマトリ)(子ども)、三味線、笛、太鼓等総勢40名がこれにあたります。獅子楽としては、道楽(ミ  
 チガク)、十善寺楽(ジュゼンジガク)、松囃子(マツバヤシ)、田島楽(タジマガク)、竹囃子(タケバヤシ)の5つの舞か  
 らなり、余興として玉取りを行います。



うさし うさじんぐう かぜよほほうさいさい さとまいがうち しんのう  
**大分県 宇佐市 宇佐神宮の風除報賽祭 俣舞楽打と神能**

宇佐神社には、多くの祭礼行事があるが、「風除報賽祭」は秋の祭礼行事です。風除報賽祭は、秋の祭礼行事です。風除報賽祭は、  
 田畑の穀物が風水害や病虫害などの被害から守られた五穀豊穡のお礼として、報賽するお祭りで、別名鉾立神事、傘鉾神事、  
 楽打神事ともいわれています。毎年10月20日~21日に行われ、20日は「俣舞楽打」、21日は、「御神能」を奉納します。  
 俣舞楽打は養老4年(西暦720年)に大念仏を奉納したことが始まりとされ、途中中断しながらも復興し、現在は北馬城  
 文化財愛護少年団(北馬城小学校2年生~6年生)により、宇佐神宮勅使門前の齋庭で行われています。  
 男子は太鼓・鉦、女子は篠笛、鉦の音に合わせ、「とうつかみ、えみたみ」(遠津神、笑み給)と楽打念仏の古歌を唱えなが  
 ら踊る素朴な舞です。  
 御神能は、12世紀に「申楽(サルガク)」として始まったと伝えられるが、のちに中絶しました。大内義弘が15世紀に中  
 興し「神能」と称したが再び中絶しました。17世紀始めに中津藩主であった細川忠興によって再興され、毎年絶えることな  
 く演じられています。御神能は、大蔵流能の系統で「宇佐観世」とも呼ばれ、宇佐神宮神能会により、宇佐神宮の能楽殿で毎  
 年違う演目で行われています。現在、大分県無形文化財にしていされています。  
 俣舞楽打(10月20日;宇佐神宮勅使門前の齋庭) 御神能(10月21日;宇佐神宮の能楽殿)



みやこのじょうし やまだちよう きりしま いだ さつま いぶき げんざい つむ やまだ きょうどげいのう  
**宮崎県 都城市 (旧山田町) 霧島に抱かれて… ~薩摩の息吹を現在に紡ぐ山田の郷土芸能~**

霧島盆地に広がる山田町は、延喜式に島津駅と記されています。平安時代、平季基が開墾し、藤原頼道に寄進したと伝えられ、  
 島津荘の始まりとされています。相撲甚句、明治34年 前田正名が水路を開発、水田が作られるようになり、人々にゆとり  
 が生まれました。相撲大会や、夏祭りが行われるようになり、これが進展して、相撲甚句が出来上がりました。瀬茅地区の諏  
 訪神社に五穀豊穡を祈って、俣踊りが始まりました。慶長3年島津義弘は朝鮮の役に出兵、苦難の末勝利を得たが、これを期  
 に、農民皆兵のため棒踊りを奨励したのが平山の棒踊りです。山内一地区の「バラ踊り」は、1352年足利尊氏が建立したと  
 される安原神社に奉納される踊りで、熊襲との戦いを表すと伝えられています。



み さとちよう きたごうそん きたごうそん ひとびと でんしろうぶん か せいかつふうしゅう  
**宮崎県 美郷町 (旧北郷村) 北郷村の人々の伝承文化と生活風習**

宮崎県北部に位置する美郷町北郷区(キタゴウク)(旧北郷村は、火伏(ヒブセ)地蔵の里として自然豊かな山あいの地域です。  
 映像では1年間を通じた「生活習俗」と、6つの「伝統芸能」をまとめました。それらはこの地域に代々受け継がれてきたもの  
 が多く、遠い昔の人々の暮らしの様子がうかがい知ることができます。特に「伝統芸能」については、後継者が圧倒的に不足  
 しており、伝統文化の継承が年々難しくなっているのが実情です。失われつつある伝統を見直し、地域住民の伝統文化の  
 再発見、およびそれに対する意識の高揚を目的に制作された映像記録です。



宮崎県 美郷町 (旧南郷村) 百済王族伝説の証 師走まつり

百済王族伝説とは、朝鮮半島で滅ぼされ、宮崎の海岸に別々に流れ着いた百済の王族の親子が、年に1度対面するという言い伝えであり、それを再現した祭りが「師走まつり」である。本映像は1300年を経た今も受け継がれているこのまつりの、全ての工程を追った記録である。現在、百済の王族の父・禰嘉王(テイカオウ)は神門神社に、息子の福智王(フクチオウ)は比木神社に、それぞれが神として祭られている。毎年1月下旬に行われる「師走まつり」では、息子の福智王のご神体と父・禰嘉王のご神体とが年に1度対面する儀式的形態をとる祭りといわれ、あわせて五穀豊穡と災難消除、安産祈願などの祭事が一体となって1つの祭りをなしています。



鹿児島県 鹿屋市 (旧輝北町) 「ロマンを求めて、星の降る里へ」  
～豊かな自然が育んだ、輝北町の郷土芸能～

大隈半島の北部、輝北町はかつて優良馬の産地でした。当時は「驥北」と呼ばれました。輝北町は、平成3年から、4期連続、「日本一星空のきれいな町」に選ばれ、550メートルの高台、上場公園(ウワバ)には、輝北天球館が作られました。平房地区では、3月の第1日曜日、石牟礼神社の祭礼で、棒踊りが奉納されます。この棒踊りの起源は「田唄」と「棒術」が合体して、出来上がったといわれています。柏木地区では、旧暦の8月15日、棒踊りが披露されますが、一時期途絶えていたものを昭和49年復活したものです。その他、岳野(タケンノ)棒踊り、朝倉太鼓踊りなどが収録されています。



鹿児島県 東串良町 現在も息づく先人の思い ～東串良町に伝承される郷土伝統芸能～

東串良町の郷土芸能は、農業に関するものがほとんどです。その中から毎年行われる7つを収録しています。唐仁の八月踊り：江戸時代初期の頃、唐仁―柏原間が干拓事業で水田化されたのを祈念して始められたと伝えられています。(行事開催日：9月第1土曜日) 溜水の寺踊り：明治元年の廃仏毀釈の折、焼き討ちにあった栄泉寺の和尚と家族の怨霊を手厚く葬るために奉納されたと伝えられています。9月上旬の水神祭で披露されています。岩弘の鉦打ち：曲は6曲で、旧暦8月15日の水神祭で奉納されます。柏原相撲甚句踊り：この行事は柏原大相撲とともに行われ、疫病退散と大漁・船の安全を祈願して始まったとされています。廣田神社・宮貫神社・大塚神社の春祭り：その年の豊穡を祈念する祭典で、毎年2月に開催されます(23日宮貫神社、25日廣田神社、28日大塚神社)。



沖縄県 名護市 汀間のウシデーク 一女の祭り：ウシデークの再興を目指して一

汀間のウシデークは、古い歴史をもつ祭祀舞踊のひとつで、旧暦の8月15日に集落の女性たちだけがアシヤギ庭と呼ばれる広場で神を迎えて祈り神とともに遊ぶ喜びを琉歌(リュウカ)形式にまとめ囃子を入れて歌うもので、拝み手・こねり手・招き手などの複雑で優美な手の動きが特徴とされています。現在汀間地区婦人会を中心に保存継承に取り組みされている神御願(カミウガン)行事ですが、今回財団法人地域創造の助成を受けてDVD化することにより映像記録としての保存を図りました。



沖縄県 糸満市 海の祭祀 糸満ハーレー

糸満ハーレーの行われる糸満市は、古くから漁業で発展した町です。糸満ハーレーは、海からの恵みに感謝し、大漁と航海安全を願うウミンチュ(漁師)の祭りと同時に宇糸満(アザイトマン)の伝統行事です。かつての宇糸満は西村、中村及び新島(ミジマ)の三村(ミムラ)で構成されていたことから、祭りには三村の青年を中心に行われます。ハーレーの主な種目は、ウグワンパーレー、青年パーレー、中学生パーレー、アヒル取り競争、クヌカセー(転覆競争)、アガイスープです。また、祭りの前後には様々なウグワン(御願)が先祖ゆかりの拝所(ハイショ)で行われ、祭りへの感謝、大漁と航海安全が祈られます。時代が変化しても、先祖の気概を忘れぬようハーレーは現在でも代々受け継がれています。(行事開催日：旧暦5月4日)



沖縄県 糸満市 綱が結ぶ世代 一真栄里大綱引き

糸満市字真栄里(アザメザト)の大綱引きは、県内各地に伝わる綱引きの中でも、古式の形態を残しているといわれています。字真栄里の最大の行事で綱引きの際には、県内外で生活している出身者が帰省するといわれるほど、活気に溢れる行事です。綱引きは、旧暦8月16日に催され集落を門中(ムンチュウ)(父系血縁親族集団)によって東西に二分して行われます。集落の広場で、ウッチャーイ(落ち合い)から始まり、綱引き、ガーエー(我張り合い)、ミチジャーヌー(道芸能)、棒術などが盛大に行われます。綱引き後もアシビ(遊び)として舞踊が披露され夜遅くまで賑わいます。後継者問題など困難な点も多いが、人々は各人が伝統行事の担い手であることを自覚し、行事に携わっています。



沖縄県 読谷村 座喜味棒 わった一肝心を伝えたい

沖縄の棒は自分達の身を守るだけでなく、集団で村の防衛を果たすものでもありました。現在読谷村には地区ごとに特徴ある棒術が伝わっています。難攻不落といわれた座喜味城(ザキミグスク)の城下、座喜味地区に伝わる「座喜味棒」はその中において実践的であるといわれ、その技は座喜味棒保存会、座喜味子ども会に受け継がれています。彼らは幼い頃に組み手のパートナーを決定します。パートナーは引退するまで変わらないことはありません。毎年12月、公民館において1年の豊穡を祝う催し「共進会(キョウシンカイ)」が開かれます。おおとりを飾る「座喜味棒」は幼い子ども達の憧れの的であり、地域の人々にとっての和の象徴となっています。遠い祖先から授けられた座喜味のかけがえのない宝物を次の世代へ伝えるために、映像は地域住民の日常に生きる棒を描いた「座喜味棒」～わった一肝心(チュムグクル)を伝えたい～、また継承者達に伝える技を解説した「座喜味棒」～基本演舞～にそれぞれ構成されています。(行事開催日：12月の第2日曜日)